

■ 中間冊夫 《女性像》

自由を謳歌する若き女性！

「中間冊夫が千曲市に疎開していた頃の作品に出会いました。太平洋戦争中、千曲市に疎開し、戦後もしばらく当地に居られた頃の作品と思われます。山深い、大自然に恵まれた分校で教鞭をお取りになられ、地元の画家に大きな影響を与えてくれました。

学校の一室でしょうか？ 室内にもかかわらず、白い帽子と白のブラウスに夏の日差しがまぶしい位輝いています。当時のシャレた、若き女性に画家の目が注がれています。若く、瑞々しい感性と、敗戦の痛みを受け止めながら、作画に専念している画家の真摯な眼差しを感じます」。

この文章は千曲市に住まれているNさんが「わの会」のコレクション展に出品された際の作品のコメントです。そのまま掲載させていただきました。

独立美術特有のアクのある半抽象の作家の作品を多く見てきた私には、この作品と出会った時は正直驚きでした。この絵は戦後間もない頃、米占領政策の民主化により日本女性のジェンダーの時代が終わりつつある時期に描かれました。戦争からの解放、そして自由を謳歌する若き女性像だと思っています。この作品に一目ぼれの私はどうしても欲しく、手元不如意でしたが分割支払いをお願いして譲ってもらいました。野原理事長に時折り冷かされます。

「堀さんのコレクションには美人が多いですね」。図星でした。ドギマギし顔を赤くしていた覚えがあります。

堀良慶（千葉県柏市）

中間冊夫 《女性像》
油彩・キャンパス 72.7 × 53.0cm 1945 年頃



中間冊夫（なかま・さつお／1908-1985年）
鹿児島生れ。川端画学校に学ぶ。「1930年協会展」でH氏奨励賞。二科会展、独立展に出品。1936年独立賞。40年独立美術協会会員。樺会、十果会を結成。武蔵野美術大学教授。フォーヴィスムを追求する。東京で没。76歳。

■ 山本 正 《女医》

この絵が好きだから、抱き抱えて帰りたい！

この絵が好きだから、抱き抱えて帰りたい。こんなめぐり会いを求めて東京を歩き続ける。その様な時期でありました。仕事の都合で池袋の客先で打ち合わせを終え、次の客先には少々時間がありません。一寸立ち寄った今はない池袋骨董館の奥の方にあったアメリカングッズの店にこの絵が飾ってありました。嬉しい出会いの一瞬です。いい絵だ！ 画品もあり、山本正の代表作です。買おうと腹を決め価格交渉に入るものの、提示された価格は相場の二倍の価格です。良い絵は少々高くとも買うのがモットーですが余裕が全くない。交渉継続、一旦帰宅するも、欲しい絵は気になって仕方なく、数日後又訪問し、店主と交渉しましたが、私の心を見透かしたように強気です。他に買い意欲のあるコレクターの存在があるようです。でも諦めぬ私に智恵が湧いてきたのです。何回か訪れる内にこの作品の前に荷物が置かれていのに気付きます。隠れた部分を見てみると腕が不自然に曲がり、手はでくの坊のように見えます。作家は女性の顔に焦点を置き、胸の下方はデフォルメしているようです。私はこの作品のウイークポイントを見つけたのです。箱を退かしてもらい腕と指がおかしいとウイークポイントを突いたところ一気に半値となりました。少々高いが相場に近い価格です。私は手を打ち、この作品をゲットすることが出来たのです。

堀良慶（千葉県柏市）

山本 正 《女医》

油彩・キャンパス 64.0 × 40.9cm 1947年



山本 正（やまもと・せい／1915-1979年）
岡山県生れ。「1930年協会研究所」に通い、
里見勝蔵、野口弥太郎に師事。1938年創紀
美術協会結成に参加。47年独立賞。48年岡
田賞。49年独立美術協会会員。56年渡仏。
日本大学芸術学部教授。東京で没。64歳。

■ 島崎翁助 《白牡丹》

長男の誕生を記念して描いた愛情のこもった一枚

この絵との出会いは何時であったか定かでないが、牡丹の印象は記憶している。私は若い頃小説が好きで好みの作家については徹底して読んだ時期があった。島崎藤村もその中の一人で、藤村を理解するうえで家族関係を調べ、おのずと翁助（三男）の存在を知ることとなった。そのことは世間的にあまり知られてなく、前の所蔵者も翁助の存在を知らない様子で、私は作者不詳で絵を入手することができた。

当時、私は翁助の作品を目にする機会がなかったが、絵の魅力に負け、知名度も低い（？）画家の作品に贖物は無いであろうと安易に考え購入した。

その後、大川美術館で開催された『島崎翁助 遺作展図録』を入手して、昭和二二年作の《種トマト於久我山》を見て驚いた。手元の《白牡丹》と画風、サインが同じであったからである。制作年も一緒であり、久我山在住時代に描いたことが分かった。一般的に翁助ファンは、ハンブルク滞在時に制作したセピア色の作品が直ぐに思い浮かぶようであるが、私はむしろ昭和二二年頃の色使いの画風が好きである。

手元の《白牡丹》は濃い緑色の葉の中に三輪の見事な花が描かれた全体に花を愛でるような画家の思いが感じられる秀作である。念のため大川美術館の小此木氏経由で、ご遺族に照会したところ、「長男の島崎爽介氏の誕生を記念して描いた」作品であることが判明した。寡作の画家だけに大変貴重であるとの連絡を受けた自慢の一枚である。

佐々木征（千葉県船橋市）

島崎翁助 《白牡丹》
油彩・キャンパス 45.4 × 33.3cm 1947年



島崎翁助(しまざき・おうすけ/1908-1992年)
東京生れ。島崎藤村の三男。川端画学校に学ぶ。
1927年日本プロレタリア美術家同盟に参加。
『新風土』を創刊。44年報道班として中国へ。
51年引き揚げ。新聞の挿絵や本の装丁を手掛ける。
渡独。92年没。83歳。

■ 児島凡平 《自画像》

老友・故児島凡平さんへのモノローグ

手元にある貴方の生涯を記した本の余白に、僕の心の中の貴方に対する「墓碑銘」を書き込んであるので、やや生硬な文章だがそれを記させて貰う。

「老友児島凡平（一男）氏ト私トノ交流ヲ私ノ高校生時代ノ昭和二十八年頃ニ始マリ平成四年ノ米寿展（松山市）デノ面談ガ最後トナツタ。

彼、タトエ狂ト誇ラレヨウト只管己ガ相貌ヲ画キ続ケタ。己レトノ対峙格闘トイエル。

彼、漂泊ノ人。私ノ曾テノ養家ニ出入シタ俳人種田山頭火モ亦漂泊ノ人。

私ノ心ノ奥底ニモ同ジク漂泊ニ共振共鳴スルモノガアル」。

凡平さん!! 僕の参加している絵画等のコレクターが中心の「あーと・わの会」の会員の中で、数名の日本でも有数のコレクターが貴方の作品を評価し所有しているのに驚いた。

壮絶な赤貧の独身人生を貫き、音楽と詩を友とした老友以て瞑すべしと僕は考えるのだ。

宇都宮義文（千葉県流山市）

児島凡平 《自画像》

鉛筆・紙 27.0 × 21.8cm 1947年



児島凡平（こじま・ぼんべい／1905-1998年）
愛媛県生まれ。1951年、46歳の時、3匹のヤギを連れ松山から歩いて上京。画学校に通う。50歳で帰郷。60歳で再上京。職業、居所を転々とする。73歳で個展。79年帰郷。97年故郷で個展。洲之内徹が作品紹介。98年没。92歳。

■ 中野和高 《式典会場寸景》

親子二代のご縁に因む作品

第二次大戦後、役人だった父は公職追放になって山奥の生家（愛媛県）へ帰り、残された僅か許りの農地を耕作していた。

しかし、これでは家族を養えないので松山市の農業機械メーカーで働くことになった。中野和高氏も同県人であり故郷で作品を頒布していた時代である。

当作品はその会社が昭和三十一年に挙行了た創立三〇周年記念式典会場を飾る社章マークのついた「くす玉」と万国旗の会場寸景である。会社の役員もその頃中野氏の作品を求めていた。此の絵は長い間、父の家の玄関の薄暗い一角に掛かっていた。

私も学校を卒業してこの会社に勤務することになり、ほぼ父親と同じような職場を経験し社史編纂にも携わったが、浮き沈みの多い業績のなかで親子これまた同じ様な苦勞も味わった。親子二代が勤務したご縁の深い職場の後輩諸氏の健闘を祈ること切なるものがある。

宇都宮義文（千葉県流山市）

中野和高 《式典会場寸景》
油彩・キャンパス 32.0 × 23.0cm 1956年



中野和高（なかの・かずたか／1896-1965年）
愛媛県生れ。白馬会葵橋洋画研究所に通う。
1921年東京美術学校西洋画科卒。23～27年渡欧。「1930年協会」会員。27、28年帝展で特選。帝国美術学校教授。40年創元会創立会員。58年日本芸術院賞。65年没。68歳。

■ 峰村リツ子 《X氏像》

いよおー 日本一の肖像画描き

この一九五〇年制作の男性像は実は著名な画家の肖像画です。京橋のギャラリーKで開催された峰村リツ子展でリツ子さんが「(この男性像の)先生は、何か大きな賞をとったので記念に私に肖像画を描いてくれ!と弟子を連れてやって来たの。ちょっと威張っていたのよ。出来た作品を見せたところ、これは俺じゃない俺じゃない!と言ってとっとと帰って行ってしまった」と笑いながら言っていたと伝え聞きました。

彼の若い頃の写真を見ると実に美男子です。きっと先生、この絵の持つ老の現実、リアリティに驚いたのでしょう。

戦後の峰村リツ子はますます自由闊達になり、人物の内面の特徴を大まかな線で捉えた肖像画や、伸びやかで奔放な裸婦像に自在に腕を振るいました。

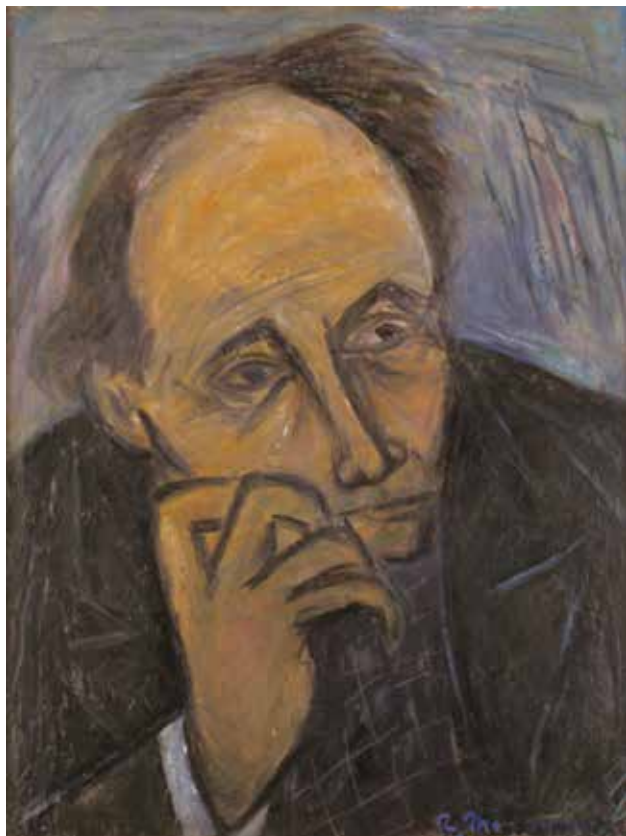
洲之内徹は戦後描かれた峰村の山本蘭村の肖像画を見て、「私は、峰村リツ子という人はやはり大したものだと思った」と評しています。

針生一郎が次のように個展の案内で峰村リツ子を紹介しています。「洲之内徹の肖像画をみると、峰村リツ子の作品がいちばん味があっっておもしろい気がした」

購入動機は私自身の老を見つめるためです。残された私の短い命を大切にするためであります。

堀良慶(千葉県柏市)

峰村リツ子 《X氏像》
油彩・キャンパス 53.0 × 40.9cm 1950年



峰村リツ子(みねむら・りつこ/1907-1995年)
新潟県生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。独立展に
出品。フォーヴィスムの影響を受ける。1934年
三岸節子らと女紳会を結成。美術文化協会展、女
流画家協会展(会員)、自由美術家協会展に出品。
80年より度々現代画廊で個展。95年没。88歳。

■ 小松義雄 《岩と海》

抽象と具象のクロスオーバー！

この作品《岩と海》をじっくり見てみましょう。小松義雄は関東ゆかりの作家です。房総や伊豆半島の岩礁海岸風景かもしれません。海は黒く黒潮に見えます。

でもなんと美しい絵でしようか。抽象は元々キュビズムの如き造形の分割、フォーブの如き色の分割から進んで行ききました。正にこの絵は抽象絵画の中でも画面に対象の造形を明確に残し、見たときの感情を形と色彩で残した、抽象と具象がクロスオーバーした作品です。

図太い黒の輪郭線は一九三一年二月、ピカソが制作した《水差しと果物鉢》（グッゲンハイム美術館蔵）の黒の図太い輪郭線に良く似ています。小松はパリでピカソから直接薫陶を受けています。日本人でピカソに薫陶を受けた作家は極めて少ないのです。ピカソが描いた図太い黒の輪郭線の年代は滞欧期と合っています。

抽象作品は買った動機を言葉で表すのは難しいのですが、身の回りに飾り、この絵から力強さ、元気の源をいただこうと思っっています。小松義雄の代表作。後世に残したい一点です。小松義雄の住まいは水戸の偕楽園にほど近い千波湖畔でした。

堀良慶（千葉県柏市）

小松義雄 《岩と海》

油彩・キャンバス 50.0 × 72.7cm 1958年



小松義雄（こまつ・よしお／1904-1999年）
東京生れ。昭和期の洋画家・抽象画家。慶應義塾大学仏文科卒業。渡仏。ピカソの影響を受ける。1939年銀座三越で個展。自由美術家協会会員。個展を重ねる。50年モダンアート協会創立に参加。72年日動画廊で個展。99年没。95歳。

■ 桂 ゆき 《みみずく》

人間社会をユーモアで痛烈に風刺・批判

六、七年前のある日、久しぶりに馴染みの画廊に出かけてみたところ、この絵が壁にかけられていた。亀裂等保存状態が非常に悪いが、絵自体は面白味のあるいい絵であった。ひよこも可愛い。作者は桂ゆきとのことであった。私はそれまで桂ゆきがどのような画家か、ほとんど知らなかったが、絵のよさに惹かれその場で購入することにした。

その後、下関市立美術館で開催された「桂ゆき展」の図録を入手して画業の全容を知ることができた。それによると、初期から晩年まで画風は変化しているが、一貫しているのは他の画家にはみられないユニークさである。特に、一九五〇年代から一九七〇年代までに描かれた人間社会をユーモアによって痛烈に風刺・批判した作品は実に面白い。一九六九年の《はだかの王様》などは、見ていて思わず笑い出したくなるほどである。図録の年譜部分には、写真が掲載されているが、その中の一枚を見て驚いた。桂ゆきが絵を描いている後ろに、この絵があったのである。だが、その絵はひよこではなく、卵のままであった。何故卵からひよこに変えたのであろうか。また、何故このようなみみずくを描いたのであろうか。考えてみるのも面白い。この絵の制作年代が、太平洋戦争後間もない時期であることも一つのヒントになるかも知れない。それにしても、このみみずくは、実に愛嬌があって面白い顔をしている。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

桂 ゆき 《みみずく》

油彩・キャンパス 48.5 × 59.0cm 1947～48年頃



桂 ゆき（かつら・ゆき／1913-1991年）

東京生れ。アヴァンギャルド洋画研究所に学ぶ。1938年九室会創立会員。46年女流画家協会創立会員。50年二科会会員。渡欧米、アフリカ旅行。現代日本美術展で最優秀賞。山口県立美術館、下関市立美術館で回顧展。東京で没。77歳。

■ 古茂田守介 《少女像》

地味で控え目な絵の中にある深い味わいと温もり

古茂田守介は病弱だった。しかし、絵を描くことが何より好きだった。数多くのデッサンが残されているが、油彩は少なく貴重である。古茂田守介の絵は上手さを感じさせるものではない。むしろ素朴な描写である。

だが、それを超える何かがある。それは、地味で控え目な絵の中にある見る人の心に沁み込んでくる深い味わいと温もりである。

この《少女》は、古茂田守介の妻の妹が開いていたバレエ教室に通い、踊り子を描いていた当時のものである。この少女もバレエ教室の生徒であろう。あどけなさの残る清らかな表情が愛らしく可愛い。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

古茂田守介 《少女像》
油彩・キャンパス 22.5 × 15.5cm 1946年



古茂田守介（こもだ・もりすけ／1918-1960年）
愛媛県生まれ。1937年上京。猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、国際具象美術展、日本アンデパンダン展に出品。具象絵画を追求。フォルムの求道者。東京で没。42歳。

■ 古茂田守介 《裸婦二人》

タブローを超えた素描

《裸婦二人》は、病弱で外出することが少なかった画家が、画室に籠って描き続けた中で、長いことアトリエに飾られており、この作品を超えるために、日々、挑戦していたものと考えられる。

平成二年に目黒区美術館で開催された古茂田守介展図録に写真が掲載されている。確かなデッサン力、重厚さ、存在感に圧倒され、まさに素描の域を超越している。

古茂田は、二〇代の頃、師の脇田和郎で夜遅くまで新制作の仲間達と切磋琢磨しながら猛烈に描きまくっていたと脇田夫人からお聞きした。

四二歳の短い生涯であったが、歳を重ねて、どう変化していくのか、見極めてみたかった作家である。

新井博（埼玉県川越市）

古茂田守介 《裸婦二人》

素描・紙 37.0 × 25.0cm 1954年頃



古茂田守介(こもだ・もりすけ/1918-1960年)
愛媛県生れ。1937年上京。猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、国際具象美術展、日本アンデパンダン展に出品。具象絵画を追求。フォルムの求道者。東京で没。42歳。

■ 清宮質文 《少女》

無限の空間の中に！

東京藝大教授への誘いを「私に描く時間は、そんなに残されていない」と断わり、清宮の中、内面の世界、澄んだ空間を追求し続けた清宮質文。

寡作で、自己の納得した作品しか発表せず、版画を版で描く絵画として、一点、一点にこだわりをみせた。

《少女》、ガラス絵でこれだけ深みのある色彩、独特の滲み、透明感。眺めているだけで、清宮質文の世界に引き込まれていく。

清宮が一番尊敬していた画家が脇田和と亮子夫人から聞いた。

その脇田も清宮を絶賛していた。相互に理解し合える微笑ましい関係である。

新井博（埼玉県川越市）

清宮質文 《少女》

ガラス絵 14.0 × 20.0cm 1960年代



清宮質文(せいみや・なおぶみ／1917-1991年)
東京生れ。父は画家・清宮彬。同舟舎に学ぶ。
東京美術学校油画科卒。慶應義塾商工学校の
美術教師。1957年春陽会会員。サエグサ画廊、
南天子画廊、フォルム画廊等で個展。木版画、
ガラス絵等を制作。東京で没。73歳。

■ 清宮質文 《雨後の貯水池》

版の中に深く澄んだ無限の世界を求める

私が清宮質文の絵に最初に出会ったのは、二〇年ほど前になる。以来、静謐で詩情性豊かな作品に惹かれ、コツコツと作品を収集してきた。

清宮質文はすぐれたガラス絵や水彩画等も残しているが、その本領は木版画にある。版画ではあるが同一の作品でも、形、色等摺りが一点一点違い、独立したものとなっている。摺りの枚数も少なく寡作である。技法を駆使し、徹底して摺りにこだわったが、それは、作家の内にある悲しみ、あやうさ、儂^{はかな}さなど移ろ^はう心の動きを深く澄んだ無限の世界に実現するためであった。

この《雨後の貯水池》は、手前に憂いを含んだ瞳の横顔の少女がいる。それから湖岸、寄せる波、水面、取水塔、対岸の丘陵、そして空へと広がっていく。

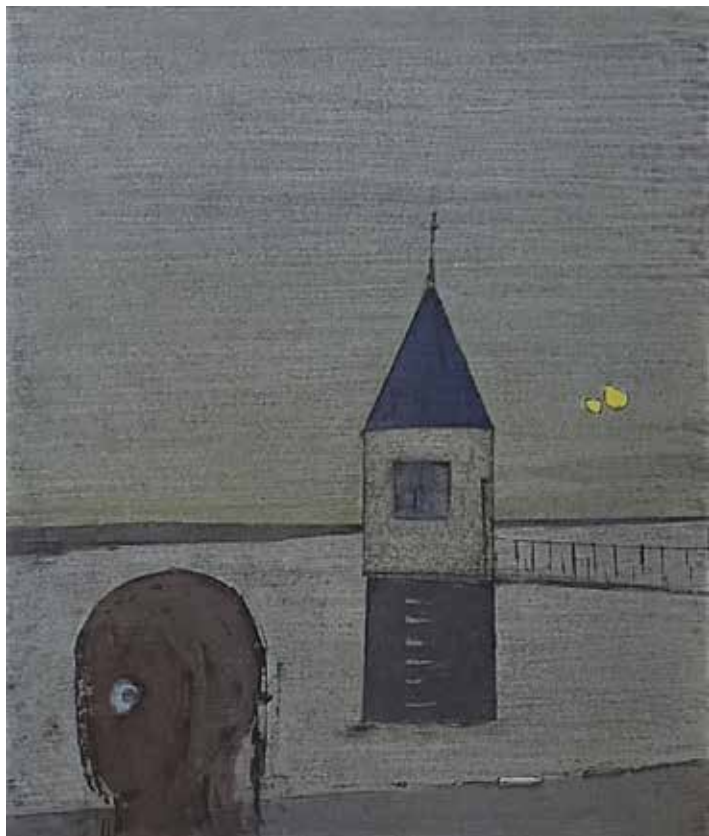
画面は銀灰色主体の木目を生かした繊細で微妙な色調となっている。また、少女などの輪郭線は凹版を使った鋭い線で描かれ、くつきりと、ものの形が浮かびあがっている。この線は無限の世界へと繋がっているのだからか。

空中に飛ぶ黄色い蝶は、少女の明日への期待・希望を象徴しているのかもしれない。

私が、この作品に何ともいえない郷愁・懐かしさを感じるのは、この風景に小学校の遠足で行った時に見た山口貯水池のことを思い出すからであろうか。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

清宮質文 《雨後の貯水池》
木版画・紙 17.9 × 15.2cm 1966年



清宮質文(せいみや・なおぶみ/1917-1991年)
東京生れ。父は画家・清宮彬。同舟舎に学ぶ。
東京美術学校油画科卒。慶應義塾商工学校の
美術教師。1957年春陽会会員。サエグサ画廊、
南天子画廊、フォルム画廊等で個展。木版画、
ガラス絵等を制作。東京で没。73歳。

■ 太田聴雨 《愛陶》

気品高く端正な美人画

太田聴雨という画家の名前は知らなくても、和服姿の五人の女性が天体望遠鏡で天体観測をしている日本画《星をみる女性》（一九三六年帝展出品作、東京国立近代美術館蔵）は、記念切手にもなっているので御存じの方が多いであろう。私はその絵を東京国立博物館での展覧会で初めて観た時、望遠鏡という当時モダンなものに和服姿という意外な組み合わせと女性の清楚な美しさに強く心惹かれた。

本作《愛陶》は、インターネットオークションに出品された作品であるが、《星をみる女性》と同じような雰囲気を感じ落札したものである。両手で陶器を慈しむように持つ女性の気品が高く、端正な趣きが魅力的である。着物の柄も品よく、渋い色彩で丁寧に描かれている。これだけの美人画を描ける画家が、現在忘れられつつあるのは、美人画に徹しなかったことも一因にあるのかもしれない。今後再評価されてよい画家である。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

太田聴雨 《愛陶》

彩色絹本 46.5 × 51.5cm 制作年不詳



太田聴雨（おおた・ちょうう／1896-1958年）
宮城県生れ。1910年上京。22年プロレタリア美術の先駆となる第一作家同盟を結成。27年前田青邨に入門。30年日本美術院賞受賞。36年同人。帝展にも出品する。51～58年東京藝術大学助教授。東京で没。62歳。

■ 木村莊八 《牛肉店階上》

東京下町の懐かしき風俗・人情

木村莊八は、明治の実業家で牛肉店「いろは」の創業者・木村莊平の八男として、東京日本橋の「いろは第八店」で生まれ育った。

父の死後、春陽会展に出品した《牛肉店帳場》は、帳場で働いていた若い頃を回想して描いた作品で、木村莊八の代表作となっている。その絵からは当時繁盛していた店の活気・雰囲気がよく伝わってくる。

この《牛肉店階上》は、その絵の続作ともいえる作品である。店の二階の様子が描かれており、階段からは、銚子を片手に乗せた賄いの女性が上ってくる場所である。この作品は一九五五年の春陽会展の出品作と考えられ、木村莊八の最晩年、若き日を懐かしく思いながら描いた姿がしのばれる。いろは牛肉店の壁には、五色の市松格子のガラス障子がはまっていたそうであるが、この絵にもそのガラス障子が描かれている。

木村莊八の絵は人物が描かれていると、その人物が実に生き生きとして、その場にいるような臨場感がある。絵が生ききているのである。

木村莊八は油絵のみならず、挿絵、芝居・映画の時代考証、随筆等文学にも優れた仕事を残した。また、小唄の師匠でもあり、多芸多才の粋な人でもあった。木村莊八の絵に、伝統文化の息づく懐かしい情緒・人情味があるのは、そのような素養があったからであろう。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

木村莊八 《牛肉店階上》

油彩・板 26.8 × 39.2cm 1955年



木村莊八(きむら・しょうはち/1893-1958年)
東京生れ。白馬会葵橋洋画研究所で学ぶ。1912年岸田劉生らとフェウザン会を結成。草土社を結成。院展、二科展に出品、18年第5回再興院展樗牛賞。24年春陽会会員。挿絵画家でもある。東京で没。65歳。日本芸術院恩賜賞。

■ 南城一夫 《静物》

温もりのある色彩と詩情

南城一夫は一九二四年に渡仏。一九三七年に帰国した。郷里前橋に戻った後は、世間嫌い、内気な性格もあり、外部との接触を避け画室にこもって制作をした孤高の画家である。

自分が納得するまで作品を完成させない厳しい姿勢から非常に寡作で、市場に作品が出てくることは稀であり、幻の画家とも言われていた。南城一夫の作品は初期から晩年までマチエール等表現上の変化はあるが、一貫した色彩の美しさ、温もり、やさしさがあり、どこことなく飄々としたユーモアもある。例えば、刺のある栗とかサボテンを描いた作品があるが、その刺には針のような鋭い刺々しさはない。このようなところにも南城一夫らしさが出ている。

この《花》はインターネットオークションで入手できたものであるが、状態も良く、マチエール、色彩等、南城一夫の絵の特徴がよく出ている佳品である。花、壺、柘榴など曲線を主体に画面が構成されていることも、絵に一層の温かみを加えている。特に輝くような色彩の美しさには目を見張らされる。

一九八一年、群馬県立近代美術館で回顧展が開かれた。その図録には南城一夫の顔写真が載っているが、その目は、実に清らかで、美しく、澄んでいる。

南城一夫の絵は、見る人の心を幸せにさせてくれる。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

南城一夫 《静物》

油彩・板 40.0 × 31.0cm 制作年不詳



南城一夫(なんじょう・かずお/1900-1986年)
前橋市生れ。本郷絵画研究所に学ぶ。東京美術学校西洋画科卒。1924～37年渡仏。ロジェ・ビシエール、アンドレ・ロートに学ぶ。42年春陽会会員。兜屋画廊等で個展を開催。81年群馬県立近代美術館で南城一夫展。安中市で没。85歳。

■ 木田金次郎 《晩秋風景》

郷土の風景を愛し描き続けた小説のモデル画家

木田金次郎は有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』のモデルになった画家である。有島武郎は上京して画家の道に進みたい木田金次郎の気持を諭し、地元である北海道の港町岩内で絵を描くことを勧めている。有島武郎の死後、漁師から画業に専念するが、一九五四年の洞爺丸台風による大火でそれまでの作品の大部分が焼けてしまった。その後、画業を再開し精力的に制作したが、作品が市場に出てくることは非常に稀である。

この絵《晩秋風景》にはサインがなく、正式の鑑定書もない。ただ、岩内に縁のある方の証明があるだけである。だが、私にとって正式の鑑定書の有無は問題ではない。それは、絵自体の良さと自由・大胆な描き方、そして、暮れゆく晩秋の風景を描いたこの絵からは、地元岩内を愛し、描き続けた木田金次郎でしか描きえない雰囲気・空気が伝わってくるからである。

この絵に私が特に惹かれるのは空の描写である。雲が浮かぶこの夕空を見ていると、木田金次郎が岩内で描き続けてきたことを思い、なんとも言えずじんとした感傷的な気分になる。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

木田金次郎 《晩秋風景》

油彩・紙 22.5 × 32.0cm 制作年不詳



木田金次郎（きだ・きんじろう／1893-1962年）
北海道生れ。1908年上京。有島武郎を知る。
19年東京で作品展開催。28年満州・朝鮮写
生旅行。大連個展。45～49年全道美術協会
創立会員。54年北海道文化賞。59、62年日
本橋高島屋で個展を開催。北海道で没。69歳。

■ 金山平三 《釜屋濱の岩》

卓越した技巧と切れ味の良さ

金山平三は、いわゆる巨匠と言われる画家であり、絵の価格も高額である。だが、私は以前から小品でも良い作品があれば、手に入れたいと思っていた。世に、絵が上手いと言われる画家は数多くいるが、金山平三の絵には他の画家の追隨を許さない抜群の上手さ、質の高さ、技巧があるからである。詩情性も豊かである。一九三五年の帝展改組問題を機に、画壇から去り孤高の姿勢を貫いた生き方にも惹かれる。

この《釜屋濱の岩》は、あるオークションに出品された作品である。さほどの競り合いにならず、落札できたことは幸運だった。絵具の塗り方が実に伸びやかで、見ていると惚れ惚れとするまでの気持ちの良さがある。それは、日本刀の切れ味の良さを思わせる。描かれているのは岩と海と空だけの単純な風景画であるが、岩に打ち寄せる白波と遠くの海の色が実に美しい。岩と岩の間には、寒風を避けた春を待つ草の緑がうっすらと見える。そして、画面全体の微妙な色調と確かなマチエールにより表現された詩情と奥深さがある。

この絵を見たとき、東北地方の海岸のように思えたが、釜屋濱を調べてみると、やはり秋田県の北部、能代市に近い海岸であった。今もこの岩は残っているかもしれない。

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

金山平三 《釜屋濱の岩》

油彩・板 23.5 × 32.5cm 制作年不詳



金山平三(かなやま・へいぞう/1883-1964年)
神戸市生れ。東京美術学校西洋画科を首席で卒業。1912～15年渡欧。16、17年文展で特選。帝展審査員。44年帝室技芸員。57年日本芸術院会員。日展に出品。風景画は一貫したテーマ、マチエールを探求する。東京で没。80歳。

楠 瓊州《寒光山水図》

最後の南画家 楠瓊州

一九九四年一二月号の美術誌の画廊情報に「最後の南画家楠瓊州」とあり、永井画廊（銀座、当時は社会思想派画家の個展をよくやってきた）に遺作展を見に行く。ちょうど一か月前に文人画家・浦上玉堂の《蠹く山々》を見て感心したせいもあり、同様の南画家に興味があった。古本目録の画集名で名前だけは知っていた。その画集『楠瓊州画集』（滝谷由亀編、定本もあり）に掲載されている作品（軸装の水墨彩画）が展示されており、天井裏にまとめて保管されていたと聞く。花卉画鶏頭などのアカ色が目に残り、玉堂似の小品もあり、珍品板絵の《旭にさくら》を購入した。その後は加島美術（京橋）の図録に年三、四点掲載されていることがわかり、何点か購入した内の傑作がこの《寒光山水図》である。「第三回私の愛する一点展」（梅野記念絵画館、二〇〇三年）に出品、冬陽だが暖かそうな黄光の道筋が林を抜け奥の山を後光のように照らしている絵だ。画家の一本道、孤高の道にも見えてくる。

書道界の重鎮・上田桑鳩、美術評論家・河北倫明がその絵画を認め「異色の水墨画家展」（京都国立近代美術館、一九七六年）で紹介され、まとまったコレクションを所蔵している敦井美術館（一九八七、九六年）、尾道市立美術館（一九九〇年）では個展も開催されている。

鈴木忠男（東京都江東区）

楠 瓊州《寒光山水図》

墨画淡彩紙本 158.5 × 29.0 cm 1952年



全体図



楠 瓊州（くすのき・けいしゅう／1892-1956年）
広島県生れ。1907年服部五老の内弟子となり、南画を学ぶ。10年江上瓊山宅に寄寓。18年上京。画壇から離れ、新しい南画を研究。東京で没。64歳。76年京都国立近代美術館にて「異色の水墨画家 水越松南・山口ハ九子・楠瓊州」展。

■ 吉岡 憲 《漁村》

絵と対峙した画家 二六歳の作品

「絵を描くことによって自分が生きていることを自覚する人だけが絵を描ける」。
吉岡憲の言葉がある。

この「漁村風景」にもその裏付けが感じられます。生き生きとしたタッチと重厚な色調がみごとに調和して力強い画面を構成しています。

ちょっと見て目を離すことが躊躇ためらわれるような迫力のある絵です。

四〇歳で不明の死を遂げたことを思うにつけ、この作品は多くのことを内に秘めているような懐の深い絵だと思います。第一九回（一九五一年）独立展出品作。

野原宏（埼玉県久喜市）

吉岡 憲 《漁村》

油彩・キャンバス 49.8 × 60.3cm 1951年



吉岡 憲（よしおか・けん／1915-1956年）
東京生れ。川端画学校に学ぶ。1935～39年
ハルビン滞在。聖ウラジミール専門学校卒。42
～46年陸軍報道班国立ジャワ美術学校を創立。
43年独立展で独立賞。48年独立美術協会会員。
49年日大芸術学部講師。56年没。40歳。

■ 荒井龍男 《朱の中の朱（イビラプエラ）》

絵の中を疾走した男。日本にもいた、世界の新しい絵の潮流にのった画家

一九五四年一月、モダンアート世界連盟が荒井龍男のフランス滞在中に発足しました。自ら日本代表に選出され、第一回の展覧会を東京で行う予定（実現はしなかった）の記事がサンパウロ新聞に掲載されています。レジエ、ザッキン、カルダー、ポロック、ニコルソン、セベリーニらが加わっていました。（『荒井龍男作品集』目黒区美術館編より）

荒井龍男の魅力は絵の素晴らしさはもちろんのことですが、その行動力と時代の潮流にのれる実力をもっていったことで多くの画家と交流して、自分の目指す絵を求め続けたことにもあると私は思っています。

この絵を描いた翌年には、東京国立近代美術館に收藏された同じ画題の《朱の中の朱》があります。大きさはこの絵の倍ほどです。第三回サンパウロ・ビエンナーレ出品作で、図柄もほぼ一緒なので、展示されたその作品を期待してみましたが、どうもこの絵のほうが私にはすっきりと腹に収まりました。

この年一九五五年七月、ブリヂストン美術館で荒井龍男帰朝展を開催、九月二〇日、膀胱癌手術後急死、享年五一歳 誠に残念。

野原宏（埼玉県久喜市）

荒井龍男 《朱の中の朱（イビラプエラ）》
油彩・キャンバス 45.8 × 53.0cm 1954年



荒井龍男（あらい・たつお／1904-1955年）
大分県生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。1934～36年渡仏。ザッキンに学ぶ。37年自由美術家協会会員。50年モダンアート協会創立会員。NYリバーサイド美術館、サンパウロ近代美術館、ブリヂストン美術館で個展。55年没。51歳。

■ 鳥海青児 《黄色い人》

忘れられない絵

一度見たら忘れられない絵があります。この作品もそうでした。数年前に見せていただいた印象深く記憶に残っていたこの絵が、回りまわって私の目の前に現れたのです。

あきらめかけていたものを手中に収めることが出来ました。

コレクターは強欲で執念深くなくてはなりません。しかし何時もそうだとすると美の神に会いそうを尽かされることになります。そんな苦い経験もして、一枚また一枚と手元に集まってくるのです。またこの絵のように思いがけずめぐり合うこともあります。

「盗んでも欲しいような絵がその人にとって、本当に好きな絵である」。洲之内徹の言葉です。なかなか思うようにいかないのが世の常であり、どこかで妥協してしまい、悔やんだり、時には望外な喜びを感じたり、絵そのものの魅力と巡りあわせの妙でコレクションは成立しますので、まさに自己表現そのもののようです。

この絵の「黄色い人」は何を考えているのでしょうか？

野原宏（埼玉県久喜市）

鳥海青児 《黄色い人》

油彩・キャンバス 21.3 × 26.4cm 1956年



鳥海青児(ちょうかいせいじ/1902-1972年)
平塚市生れ。金子保に学ぶ。関西大学経済学部卒。1928年春陽会賞。30～33年渡欧。33年春陽会会員、43年独立美術協会会員。56年芸術選奨文部大臣賞。58年現代日本美術展で最優秀賞、59年毎日美術賞。72年没。70歳。

■ 瑛 九 《旅人》

瑛九のリトグラフ作品のなかで私の一番好きなものです

絵の中に入って一緒にさまよい歩きたくなる思いに駆られます。

樹幹の中に大きな風船や小さい風船が漂っているようです。地上ではトリのような二本足で歩く物体があり、夢の中のような風景。しかもカラフルです。

瑛九という多才な画家の作品はフォトデッサン、リトグラフ、エッチングなどすべて大好きで蒐集していますが、生前にはあまり作品は売れなかったと言われています。この作品は一点ぐらいしか制作していません。紙面都合ではありませんか推測されています。画廊で見かけることはほとんどありません。紙面の都合であまり詳細には語れませんが、私の念力とカンの中で入手したものです。コレクターの方々の作品蒐集の苦労話が大変役立ちました。足と頭と少しのお金で名作を、ひと時かもしれないかもしれませんが手元に置くことが出来ます。

瑛九は、既成の美術団体や権威主義を拒否したデモクラート美術家協会の中心的存在として活躍しました。二〇一一年、生誕一〇〇年を記念して大回顧展が開催されましたが、まだまだ評価されるべき作家だと再確認しました。

後にこのグループの中から、海外でも活躍した池田満寿夫や巖嘔などが出ています。

瑛九はフォトデッサン、リトグラフ、最後は前人未踏の油彩による点描抽象画に新境地を見いだしました。作家自身は四八歳の命を天として消えていきました。

野原宏（埼玉県久喜市）

瑛 九 《旅人》

リトグラフ・紙 37.9 × 52.4cm 1957年



瑛 九（えいきゅう／1911-1960年）

宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的・抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。51年デモクラート美術家協会結成。創造美育協会に参加。60年没。48歳。

■ 菅野圭介 《静物（飛驒の箆笥）》

突然消えた絵

菅野圭介作品を愛してやまないメンバー注視の中、銀座のK画廊の社長室の壁から突然外されてしまったので、どうしたのだろうかと話題になりました。悪く言えばどこの馬の骨が手を出したのかと、思われたのかもしれない。

それほど菅野の作品は所蔵先がハッキリしているということでしょうか。まもなく調べがついたのでしよう、一件落着、梅野隆氏からお褒めの言葉とお手紙を頂戴しました。

一九九五年九月、平塚市美術館で菅野圭介展が開催された折に、さる方から展覧会評をいただいた中にこの絵のことが書かれているから文面を送る、ということでも頂いたものがあります。要約しますと静物画が一〇数点展示されたなかで、唯一飛驒の箆笥の上に乗せた果物を描いた作品が印象に残ったということです。

私もこの絵の構図の斬新さと色づかいはいつ見ても素晴らしいと思います。

今は亡き梅野隆氏が生涯かけて顕彰したからこそ、私たちがその恩恵にあずかれるわけで、その思いはコレクターとして忘れることなく絵とともに語り継ぎたいと思います。

野原宏（埼玉県久喜市）

菅野圭介 《静物（飛驒の箆笥）》
油彩・キャンパス 90.2 × 72.7cm 1958 年頃



菅野圭介（すがの・けいすけ／1909-1963年）
東京生れ。京都帝国大学文学部中退。1935～37年欧州巡遊。フランドランに師事。38年独立美術協会賞。41年日動画廊で個展。43年独立美術協会会員。52年渡米、ブラジルを経て欧州へ、同年帰国。東京で没。53歳。

■ 藤井令太郎 《ステンドグラス》

「椅子の藤井」との出会い

ここに揚げた作品《ステンドグラス》は、大川美術館特別企画展「生きている画家達」（平成七年）に展示された作品である。

藤井令太郎は信州を代表する洋画家の一人である。父・哲造は、長井雲坪の蒐集・研究者・鑑定家でもあった。また、東洋のフォスターと云われる中山晋平は伯父にあたる。このような芸術的環境のもとで、幼少の頃より画の道に邁進する。

昭和三二年第四回日本国際美術展において《アッカドの椅子》で神奈川県立近代美術館賞（新人賞）を受賞。一躍洋画壇で注目される。

半世紀も前のことになるが、私が高校時代、信州の地で教育会主催の夏期絵画講習会が開かれ、講師に武蔵野美術大学の藤井令太郎先生がお見えになった。三年連続してこの講習会に出席したことが思い出される。藤井先生はどっしりとした体格、目はギョロリとして大きく、鼻は高く、日本人離れした風貌は印象深い。また、画も骨太で大胆豪快である。この講習会の折に、絵のモチーフとしてなぜ「椅子」を描いたのか等、いろいろ話された。「椅子には建築性のもつ最も簡単な造形がある」／「近代絵画は文学性を否定することから始まった」／「絵画はいかに省略するかが大切だ」等々、絵画の基本を教えていただいた。

金井徳重（長野県中野市）

藤井令太郎 《ステンドグラス》
油彩・キャンパス 53.0 × 33.3cm 1958年頃



藤井令太郎（ふじいれいたろう／1913-1980年）
長野市生れ。1937年帝国美術学校本科西洋画科卒。53年春陽会賞。54年春陽会会員。55年武蔵野美術大学教授。57年日本国際美術展で神奈川県立近代美術館賞。雄渾な筆致と堅固な画面構成で知られる。椅子の画家。80年没。66歳。

■ 芝田米三 《黒い道》

「黒」が美しい……

この《黒い道》は制作年の記述はない。キャンバスの裏に独立美術協会会員と記されているから一九五八年以降の作品だろう。

初期の作品はフォーブ調の厚塗りの風景が多い。やがて動物（馬）をモチーフとした構成的造形性の強い仕事に変わり、一九六三年《樹木群馬》で第七回安井賞受賞。この黒が美しい。

安井賞受賞のことは……「六回もこの展覧会に出品出来た事自体感謝すべき事でした。今後もより人間的なる物、より生命力のある作画を深め、魂現の世界を追求していきたいと思います。」と述べている。

その後渡欧して西洋の名画に触れたことが動機となり、女性像を多く描くようになる。着衣の深い黒、異国の生活風俗に自己のイメージを加え、幻想的な生命讃歌を謳う。晩年は巨匠作曲家を主題に「音楽」を「絵画」として表現しており、音楽家のコスチュームの深い黒も一貫して美しい。

金井徳重（長野県中野市）

芝田米三 《黒い道》

油彩・キャンバス 65.2 × 90.0cm 1959年頃



芝田米三（しばた・よねぞう／1926-2006年）
京都生れ。須田国太郎に師事。1950年独立賞、
58年独立美術協会会員。63年安井賞。65年
初渡欧。74年安井賞選考委員。日本芸術院賞を
受賞、日本芸術院会員。99年勲三等瑞宝章受章。
金沢美術工芸大学教授。2006年没。79歳。

■ 須田国太郎 《二匹の馬》

掘り出し物

千葉の建築関係の同業者より、二四〇二五年前にこの絵を見せられた時は、私自身、須田国太郎の存在を知りませんでした。

しかし、一目でこの絵は「いい」と感じました。

その後交渉して、長嶋北斎の《猿》の絵に一〇万くらい乗せて交換してもらいました。何年かして、銀座のフジカワ画廊に鑑定を依頼しました。（内心蹴られたらどうしようと心配しておりましたが）

その結果、鑑定を取る事が出来ました。思わず銀座の路上で「ヤッター」と声を出してしまっただことを今でも、鮮明に覚えております。

サインや色、筆法などから、昭和二四年頃の作品と推測いたします。

中村儀介（千葉県木更津市）

須田国太郎 《二匹の馬》

油彩・キャンバス 36.0 × 45.0cm 1949 年頃



須田国太郎(すだ・くにたろう / 1891-1961年)
京都市生れ。絵画は独学。京都帝国大学哲学
科で美学、美術史を学ぶ。関西美術院に通う。
1919～23年渡欧。関西美術院に出品。独立
美術協会会員。47年日本芸術院会員。50～
60年京都市立美術大学教授。61年没。70歳。